ふかまちのまど

第四十七号 九八(平成十)年 三月一日 発行

教育現場で思うこと(六)

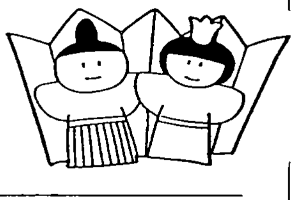
成末 肇士

ハーバード大学の発達心理学者のジェローム・ケイガン博士は、次のような論文を発表しています。

「人間には遺伝的に四種類――臆病・大胆・陽気・陰気――の「気質」がある。これは脳の活動パターンの違いによって生ずる。種々の程度はあるが、先天的な情動回路のちがいによるもので、生物学的に決定されている。生後間もない時点では、統計上乳児の五人に一人が臆病な気質に分類され、五人に二人が大胆な気質に分類される。

子育てをした人なら、兄弟でも生まれつき気質がちがっていることに気づいていると思います。遺伝的気質なら一生それは変わらないとすれば、人間はあきらめるしか仕方がありません。しかし、安心して下さい。ケイガン博士は、その遺伝的な気質でも学習によって少しずつ変化できると言っています。でも、この遺伝的気質を変えるのは大変な時間と、忍耐が必要なようです。そうだとしたら、私達親はその幼児の気質を早く知り、その気質を踏まえた育て方をすればよいのです。

生まれつき臆病な子どもを強くしようとして、しかりつけてばかりいると、子どもはますます臆病になるだけです。怖がる事があれば、その怖がる事は何か早く気づき、それが怖い事ではないことを辛抱強く教えてやることです。遺伝的に臆病な気質の子どもを、むりやり宇宙飛行士や冒険家にしようとするのは論外のことです。▲▲



深町の歴史余話(五)

千川神社物語(1)
=八幡宮参拝について=

高崎壽郎

氏神千川神社はどこの村にもある八幡宮のことで、深は地名から千川神社と呼称している。

お宮は元和二(一六一六)年の創建といわれ、祭神は八幡神と大山祇神である。宮司は中之町にある式内郷社 賀羅加波神社の山持龍郎氏。

祭礼は毎年十月一七日(もとの神嘗祭)に氏神祭が行われ、村民はこぞって参詣していた。毎年の祭事には上・中・下組が輪番で神楽又は仁和加等を奉納していた。現在は十月の第三土曜日に祭礼を行い、協賛演芸大会を開催している。

さて、昭和一九(一九四四)年から終戦まで、都会の児童を戦火から守るため学童の集団疎開が全国的に行われた。深へは大阪市福島区海老江東国民学校の六年生が、また三成国民学校六年生が、現尾道市立三成小学校(へも同じ学校の子がきた。

その内、三成へきた子の一人が、昭和十九(一九四四)年九月二十日から翌年の二月二十一日までの五ケ月間の疎開中、克明に日記を付けていた。歴史を知る上で貴重な資料である。

その中から、神社参拝を引き出してみると、

- 大詔奉戴日(太平洋戦争の始まった日で各月八日)
- 秋祭り(十月三十一日)
- 新嘗祭(十一月二十三日)
- 八社参拝・必勝祈願(十二月九日)
- 皇太子殿下御誕生日(十二月二十三日)
- 四方拝・皇室の御栄と必勝祈願(一月一日)

深の場合も同様と考えられるが、月平均二回は宮参りをしている。

氏神鎮守の森は、村ごとにある身近な神様だった。出産・結婚、病気など村の人々は何かにつけ「神仏の加護」を祈った。

戦争中は、家族や地域でも、武運長久を祈願しての八社参り(次号参照)や、五穀豊穣祈願など、お宮へ参詣することが多かった。

参道の並木を左右に、老樹のうっ蒼たる森の中の神社にお参りすると、なにか神々しさを覚えたものである。村民も、氏神八幡宮を心の寄り所にしていたことよくわかる。

今、宮参りをされると、境内が整美されていることに気付かれると思う。これは妙齢の女性のご奉仕によるものである。

先日、その女性と話す機会があったが。「私は子どもにめぐまれましたが、子どもは身体が弱く病気勝ちである。少しでも健康になるように神様におすがりしている。深の方は温かく声かけし、優しく接してくださる。心から感謝している」と、言われた。

拝殿の拭き掃除から境内の草取りまで、黙々と奉仕される姿には頭が下がる。

又、盆前や秋祭りの前に如水館高校野球部による境内の清掃にも厚く感謝している所である。▲▲

絵・船本輝明

わが☆満蒙開拓青少年義勇軍記☆

藤川 一

もう半世紀も昔のことですから記憶は薄れていますが、私の若き日の貴重な体験を書き残しておきたいとおもいます。

(一)

三原の尋常高等小学校を卒業した私は、横浜で左官の仕事をしていました。

時は昭和六年(一九三一)満州事変勃発と翌年の満州国樹立、昭和十二年(一九三七)日中戦争と、我が国は大陸への進出を意図し、国民の関心も次第に高まっていました。

政府はそれを支援するため、昭和十二年(一九三七)の秋、国策の一環として、「満蒙開拓青少年義勇軍」の募集を始めました。対象は、尋常高等小学校卒業から徴兵検査を受けるまでの年齢の若者です。

街角のあちこちに、募集のポスターがはられました。今想い出してみますと、私は「新天地で頑張ろう」というより、「何かよいことがあるだろう」という軽い気持ちでこれに応募したような気がします。

昭和十三年(一九三八)私は、茨城県水戸市の近くにあった内原訓練所へ入所しました。十七歳だったと思います。神奈川、東京、茨城、岩手などから来た人がいました。

「満蒙開拓青少年義勇軍」の名称から私は、将来大陸での農業の指導者を養成する所と思い、農業の実習が主な日課と思っていましたが、大きく違っていました。農園での作業はほんのわずかで、来る日も来る日も軍事訓練でした。

「これは、自分の考えていた所とは違うな」と思いましたが、もう後の祭りでした。訓練があまりつらいので、ある日仲間四人と脱走計画を立てましたが、寝過ごしてしまい、失敗に終わりました。

訓練は半歳で終わり、いよいよ出発です。特別列車に乗り、伊勢神宮へ参拝しました。内宮 外宮と長い時間歩いたのを覚えています。

又、汽車に乗り福井県の敦賀市へ、そこから朝鮮(現在の朝鮮民主々義人民共和国で、当時は日本国の領土)の羅津という港町を目指して出航しました。▲▲

展望席

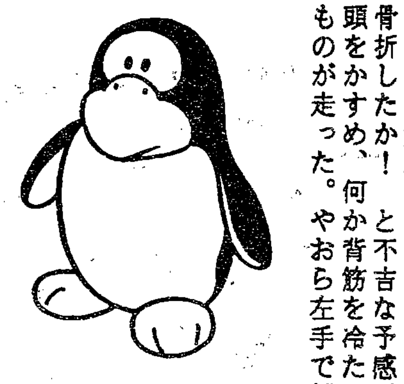
深町に住むお年寄りと、小学生の交流が二月末に行われた。中組の岡本さんが椎茸の原木を提供され、尚寿会員十人が種の植え付けに協力した。▼それに加えて作業終了後、共に労をねぎらうお茶を飲み、今度は、学校に備えつけのパソコンを使って、小学生がお年寄りを「教育」した。何とも微笑ましく絵になる風景である。▼中学生、高校生による凶悪犯罪が連日のように報道される。九七年一〜四月期は前年同期より二六%増の九千五十余人=(警察庁・検挙・補導)=。大きな交通事故や、労働災害は、ある日突然起こるのではなく、日頃の小さな事故の集積結果と言われる。老弱のギャップの原因は日常にある。今回のような交流の場ができることにより、思いやりある人づくりができる。▼この種の交流活動の要はやはり、学校長を始めとする教職員の皆さんの必要度認識ではあるまいか。地域住民が学校現場に踏み込むことはそう簡単なことではない。開かれた学校を「是」として初めて可能である。子どもの健全育成には、教師と保護者そして地域住民の連携が必要ではなかろうか。

歳はとりたくない

河野　強

「アー歳はとりたくないナアー」子供のころからよく耳にした言葉である。とるとか、とらないとかいっても、生きている限り自然に年寄りにならねばならないのに、どうしてあんなことを大人は言うのだろう。と思っていたが、いつしか自分がその立場におかれる年齢になり、この言葉を味あう真実の思いである。

さる夏の夕方のことである。家から一キロメートル離れた田圃への潅水を止めに行っての事故である。自動二輪車（カブ）で、草の生えた細い道を、馴れと勘で乗って行き、仮橋の手前で車を止め、降りようとしたが路面が悪く、車が急に右に傾いた。やむなく右足で路面を踏むつもりが足掛かりがなく、宙を踏み、アッ！と思う瞬間に倒れ。即座にハンドルを手放して横に飛んだ。



もう辺りは暗く飛んだ所が悪かった。生い茂るクズ葛の中へ頭から突っ込みそのまま川へ落ちてしまった。

顔えかぶさったヘルメットを直そうとしたが、どうしたこと右手が全然動かない。しまった″……大変なことになった。骨折したか！と不吉な予感が頭をかすめ、何か背筋を冷たいものが走った。やおら左手で鎖骨を撫でてみた。おれてない。でも右手はだらりと下がり何の感覚もない。

道から約一、五メートルの川の中。さいわい日照り続きで水が流れていない。助けを呼ぶにも一軒の家もなく、もう日もとっぷり暮れ通る人もない。見上げれば、空は一面に星が見えるだけだ。……何としても川から上がらねばとときがあせるけど、右手が動かないのでどうにもならない。絶対絶命になってしまった。

しかし、人間行きづまると不思議に気が落ち着くものだ。左手で右手を土手へ上げておき、やっとの思いで這いあがることが出来た。……嬉しかった。

車はさいわい葛カズラに掛り、落ちる寸前で止まっている。もし万一、体の上へでも落ちかかっていたらと想像するとゾットした。

救急病院へ行ったが、まんの悪いことは重なるものだ。整形外科医は二日ほど不在だという。当直医が「骨折してないようだ、痛み止めの薬をだすから明日掛かり付けの病院へ行きなさい」。三角布で腕を吊ってくれただけだった。

整形外科病院では、レントゲンを撮り検査の結果、右肩内側の腱を強打した為筋が切れかかっている。治癒には三ヵ月以上との診断がでた。それから通院を半年もして動くようにはなったが、完治しないまゝ後遺症として残った。

今にして想えば、もすこし若かったら運動神経も働き、軽い怪我で済んだろうに、ほんに歳はとりたくないものだ。つくづく思ったりしたものである。

でも物は思いようだ、ここまで怪我も回復出来たことに感謝の念で日々を過ごしている。

失楽園

坪見　博文

平成九年、小説「失楽園」が新聞掲載され、テレビ・映画・で関心を集め流行語になった。

私は、映画で途中から見たが、なぜか興奮しなかった。男女の裸の場面が幾度かあったのに。……年齢のせいかな。

近頃不倫が唄に・テレビにと日常生活にとけこんでいる気がする。私もしてみたいと思ったことはあるが実行出来ずにいる。多くの人は思いながらも出来ないのでは、と想像する。

生きていて楽しい事、辛い事。選べば楽しい方をとる。不倫は快楽と思うがその後に理性にとがるられ、苦しむことを想像すると何も出来ない。

辛い事が長く続くとストレスが溜まる。それを自分の力で支配出来ている時は良いが、ヤケになると苦労が始る。

私は最近やっと幸せを見つけることが出来るようになった。食欲・性欲・金欲と色々欲を得られた時、快楽を味あう。

私は、バツイチになるまではストレスが溜まると性欲に溺れた。何かに溺れると自分が支配出来なくなった。

それが今頃やっとストレスを受け付けなくなった。身近に楽のしい事があることを知った。食欲は自炊で何でも食べられ、性欲は自分で調節出来る。金欲は持っているお金で生活すればよい。辛くなった時は、昭和十九年から三十年までの私を想い出せば今の暮らしに不満はない。

今、私の仕事は政治家の話す足踏み状態どこではない。

知人は昨年盆過ぎから最悪の景気と話された。だが、他人に迷惑をかけずに生きている。

考えを少し変化させれば、気づかなかった幸わせを得ることが出来た。昨年末、ジャンボ宝くじを買わなかった。それで一万円得をした。夢の得はなかったが……。

今年は不安定な世かも知れないが「快楽園」と名のつく年になってほしい。

・しいたけ・を植えました

深小学校（小林龍一郎校長）六年生（七人）が卒業記念に椎茸を二千本に植えつけました。

今の三・四年生が卒業するまでには、立派な椎茸を見ることができると思います。（原木は岡本義弘）様の無償提供です。植え付けは尚寿会（会長 森本忠）役員約十名の協力を得ました。（二月二十八日）

地域と学校が一体となって、子どもが「自然」と「勉強」に打ち込める環境づくりをしたいものです。

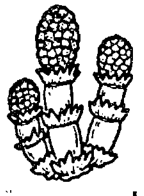
植え付け終了後、子どもとお年寄りが一緒にお茶をのみ、その後、パソコンで交流を図り、楽しい一時を過ごしました。

春夏秋冬

雪の中寒さいとわず寒椿
　自然の摂理いとも尊し

立てし鍬先に止まりて小鳥居り
　春一番と共に来しかや

三寒四温くりかえしつゝ春待つ心
　森羅万象道の小草まで



仏経西本願寺発行「大乗」新年号に、梶谷マサヨさんの投稿「主人の一周期を迎えて」が掲載されました。

今後共健筆を期待したいものです。

地頭職石原氏一族の墓

石原氏は、応安二（一三六九）年より、慶長五（一六〇〇）年に亘る室町戦国時代の約二三〇年間を、木頃庄（深・中野・本郷・木門田）の地頭職として、深の医王山田屋城を本城に、この地を治めた。

村上山の山裾に苔むした宝篋印塔や、五輪塔の古墓が数多くある。

絵・船本輝明

三月町内各種団体行事予定

◆小学校（幼）
- ▼お別れ遠足（幼）――五日
- ▼新入学児一日入学――六日
- ▼廃品回収――八日
- ▼参観日・期末懇談会　十日
- ▼子育てネットワークピヨピヨハウス（幼）一一日
- ▼六年生を送る会――一三日
- ▼卒園式（幼）――二〇日
- ▼卒業式――二四日
- ▼修了式（小・幼）―二五日

◆女性会
- ▼親睦会　上――一四日
- 中――一七日
- 下――一六日
- ▼役員会――未定

◆子ども会
- ▼お別れ会――二一日

◆上町内会
- ▼遊歩道草刈り――一日

◆如水館高校
- ▼第四回卒業式――一日
- ▼野球部沖縄遠征―二三～二六日